

# 笠鉾

国指定重要無形民俗文化財  
「八代妙見祭の神幸行事」  
やっしろみょうけんさい しんこうぎょうじ



九州三大祭  
八代  
since 1636  
妙見祭

## 《笠鉾を出す八代城下の町々》



《お問い合わせ》

八代妙見祭保存振興会

TEL 070-5819-8246

八代妙見祭のホームページ

<http://www.myouken.com>

八代妙見祭のFacebook

<http://www.facebook.com/myokensai>

《発行》

八代妙見祭保存振興会

◆事務取次／八代市経済文化交流部  
文化振興課

〒866-0844 熊本県八代市旭中央通3-11 TSビル3F  
TEL0965-33-4533 FAX0965-33-4516

平成28年度熊本県委託事業(地域づくりチャレンジ推進事業)

妙見祭情報



印刷／(株)堀川印刷  
2017.2





8人で担いでいた、笠鉾「菊慈童」 写真／竹原神社 所蔵

**笠鉾の歴史**

昔の人々は、神や御幣、山や笠、鉾などには神聖な力が宿り、神様の乗ったお神輿が神幸する際、その行く手を清めたり、お神輿にお供して神様をお守りしたりすることができると考えていました。

こうした出し物は全国各地にあり、山鉾、山笠、曳山、山車、屋台などと呼ばれ、形も大きさも様々ですが、総じて豪華な彫刻や時絵、高価な染織品を用いた懸装品などで贅を尽くして飾られています。

八代の笠鉾は、次第に大型化し、豪華になっていきました。そのため、簡単には作り替えができなくなり、部分的に修理や新調を重ねながら、

### 部材に残る修理の記録

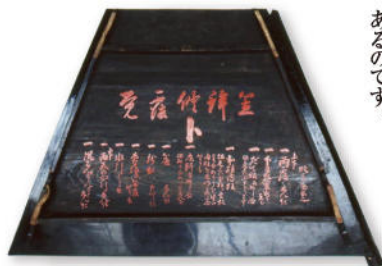
18世紀中頃以降だと考えられています。修理や改造を重ねながら受け継がれ、現在でも昔の町割りごとに出されています。普段は200個以上の部品に解体され、各町に保管されていますが、祭り前に町の人々によつて組み立てられ、祭りが終わると解体されます。この営みも江戸時代以来続けられてきた貴重な伝統です。

9基の笠鉾が現在のような姿になるのは、18世紀中頃以降だと考えられています。修理や改造を重ねながら受け継がれ、現在でも昔の町割りごとに出されています。普段は200個以上の部品に解体され、各町に保管されていますが、祭り前に町の人々によつて組み立てられ、祭りが終わると解体されます。この営みも江戸時代以来続けられてきた貴重な伝統です。

平成23年から  
担ぐ試みが復活した  
笠鉾「菊慈童」



その時代の人々の趣向を取り入れることによって、魅力ある笠鉾を造る事を目指しました。笠鉾の部材には、新調や修理の記録が残っているものもあります。それらは、笠鉾の移り変わりを示す貴重な記録であるとともに、町の人たちが代々笠鉾を守り、発展させてきた証でもあるのです。



下屋根雨具の裏に記された修理の覚え書き  
嘉永7年(1854)に伊達板(飾り板)や雨覆を新しくしたり、下屋根の裏を塗りなおしたりと大幅な修理や新調が行われたことがわかります。

祝

## 2016ユネスコ無形文化遺産登録 八代の宝から、今、世界の宝に

江戸時代の八代で、異国情緒あふれる祭礼へと発展してきた「八代妙見祭」。当時の豪華さを引き継ぎ、静と動が織りなす祭礼絵巻を、未来へ、そして今、世界に伝えていきます。

「八代妙見祭」は、11月22日・23日に行われる八代神社(旧妙見宮)の祭礼です。神輿、神馬、獅子、花奴、笠鉾、亀蛇、飾馬など40もの多彩な出し物から構成される神幸行列が特徴です。

江戸時代以来の伝統を守っていること、九州南部を代表する大規模な祭礼であることから、「八代妙見祭の神幸行事」として平成23年(2011)3月、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

八代妙見祭の特徴のひとつは、旧城下町から出される9基の笠鉾で、他に類似がない八代独特の形状をしています。こうした笠型や箱型の曳き物を伴う祭礼を「山・鉾・屋台行事」といい、九州では、博多祇園山笠行事、戸畑祇園大山笠行事、唐津くんちの曳山行事、日田祇園の曳山行事などがあります。平成28年(2016)12月1日、八代妙見祭を含む全国33の祭礼が「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録されました。



宮地小学校の  
グラウンドに並ぶ笠鉾



# 笠鉾の中はこうなっています!

## 《菊慈童》

菊慈童は、謡曲「菊慈童(枕慈童)」に登場する少年。  
笠鉾全体の装飾で物語の世界を表しています。

右の図の初期の笠鉾菊慈童の姿と現在の姿では、大きく違っているように見えます。しかし構造を見てみると、傘がそのまま大きく豪華になったのが現在の笠鉾であることがわかります。

たてぼう  
立棒



九曜紋と二引両紋は  
八代神社の神紋です。



下屋根の部分です。  
赤い屋根をかぶせて下に伊達板を下げます。そこから菊が刺繍された水引幕が下がっています。

笠台の上に立棒、上笠を乗せたところです。ここが笠鉾の心臓部です。特に立棒(青色部分)は重要で、柱が一本しかない笠鉾の骨格となります。図を見るとほとんどの部材が立棒と連結していることがわかります。



釘を使わずに組立てる笠鉾は、この「込み柱」を差し込んで固定します。小さいけれど、とても大事です。

笠鉾の背骨、「芯棒(芯柱)」です。今は2つに分かれていますが、片方を差し込んで一本の柱にします。この柱一本だけで笠鉾を支えます。



笠鉾菊慈童  
初期の姿  
(推定図)

元文3年(1738)  
二重の傘に4人持ち(担ぐ)、  
菊慈童の作り物に作り替えられる。

## 修理・新調を重ねる 現在の笠鉾 菊慈童に



毎年、妙見祭の度に組み立て・解体をしていく笠鉾。釘を使わずに組み立てる部材の数は200個から300個もあります。  
元々笠鉾は簡素な作りだったのですが、豪華になったが故に作り替えが困難になり、結果として江戸時代後期の姿を今に残しています。部材には修理の記録や町の人たちの名前が記されており、笠鉾を保存継承するために注がれた人々の熱意が感じられます。  
宮之町は、はじめは推定図のように一人です持つ傘型の出し物を出していました。傘の上には、町名が記され、傘の先端にたくさん飾りが下がっています。  
現在の笠鉾も、傘のように一本の柱によって支えられ、欄間や幕などの飾りは笠の先端から下がっており、傘型から変化して、次第に複雑になったものと考えられます。

## 笠鉾の構造

## 笠鉾は町々の宝

各町の保存会により受け継がれ、毎年組み立て・解体を繰り返す笠鉾は、普段は町々の収蔵庫に保管されています。目の届く身近なところに保管されてきたからこそ、笠鉾を大切にすることができ、受け継いでいかなければという責任と自覚が育まれてきたのではないのでしょうか。

菊慈童の組み立て  
様々な年齢の人たちが組み立て・解体に関わっています。代々伝えられてきた組み立ての技術も貴重な無形の文化財です。

## 笠鉾の装飾

笠鉾には、様々な飾りがついています。これらは、笠鉾を出す町名や八代にゆかりの縁起物、当時人々に親しまれた謡曲(能の台本)に登場する仙人・長寿を象徴する植物、獅子や龍などおめでたい題材が選ばれています。これは、八代の繁栄や不老長寿、天下泰平を願い、また、それが実現されていることを神様に感謝する人々の気持ちの表れと考えられます。

西王母の組み立て  
笠鉾は、祭りの数日前に各町内で組み立てられます。組み立て方は長年にわたり町内で口伝されてきました。





笠鉾の部材を入れる箱に  
元文3年(1738)の墨書が  
あります。現存する笠鉾の中で  
最も古い墨書です。



菊の花も  
一輪一輪、丁寧に  
作られています。

金襴に菊の絵が描かれて  
います。裏に松井家の  
御用絵師 申斐良郷の名が  
記されています。  
良郷は「妙見宮祭礼絵巻」  
(八代神社所蔵)の作者  
でもあります。



みずひきまく  
水引幕  
黒縹子地菊流水模様縹水引幕  
明治35年(1902)製  
(平成7年修復)

右手に筆、左手に菊の葉を持っています。

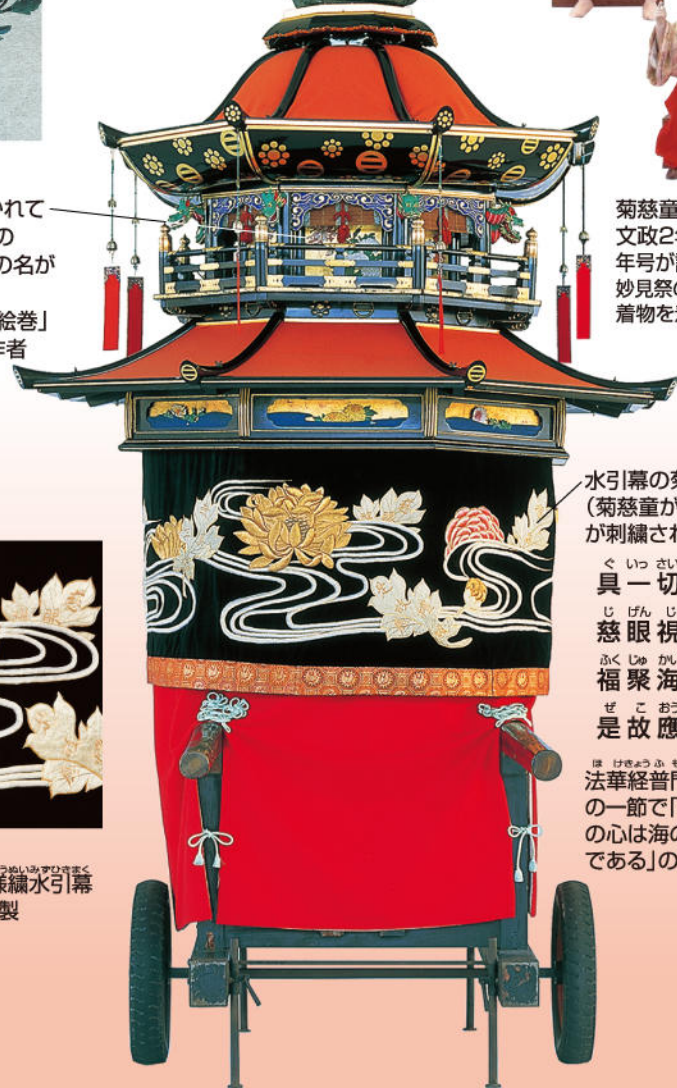


菊慈童の人形、箱に  
文政2年(1819)の  
年号が記されています。  
妙見祭の前に町の人が  
着物を着せます。

水引幕の菊の葉に文字  
(菊慈童が書いたもの)  
が刺繍されています。

く い つ さ い く ど く  
具一切功德  
じ げん じ し ゃう  
慈眼視衆生  
ふく じゅ かい む りよう  
福聚海無量  
ぜ こ おう ちようらい  
是故應頂禮

ほ けきようふ ちんぽん かんのかんきよう  
法華経普門品(観音経)  
の一節で「観音様の慈悲  
の心は海のように無量  
である」の意味です。



笠鉾「菊慈童」は、旧八代城下町の  
「宮之町」から出されています。  
菊慈童は、謡曲「枕慈童」に登場する  
少年で、仕えていた皇帝から賜ったあり  
がたいお経の言葉を菊の葉に書いておい  
たところ、菊の葉から滴る露が不老不  
死の薬となつて、700年経つても若々  
しいままであつたといひます。人々の不  
老不死への願いを表しています。  
宮之町の町名は、妙見宮(八代神社)に  
かつてあつた門前町の一部であつたこと  
に由来すると伝えられています。妙見宮と  
の縁が深いことから、神幸行列の中では  
他の笠鉾の先頭に立ち、天候が悪くても  
必ず妙見宮までお供する習わしです。



現在の笠鉾「菊慈童」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉾「菊慈童」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



# 「笠鉾」 菊慈童

(きくじどう)

9基のうち第1番

《宮之町笠鉾菊慈童保存会》



笠鉾の先頭に立つ、最も由来が古い笠鉾





葉の裏には吹きガラスで水滴が表現されています。

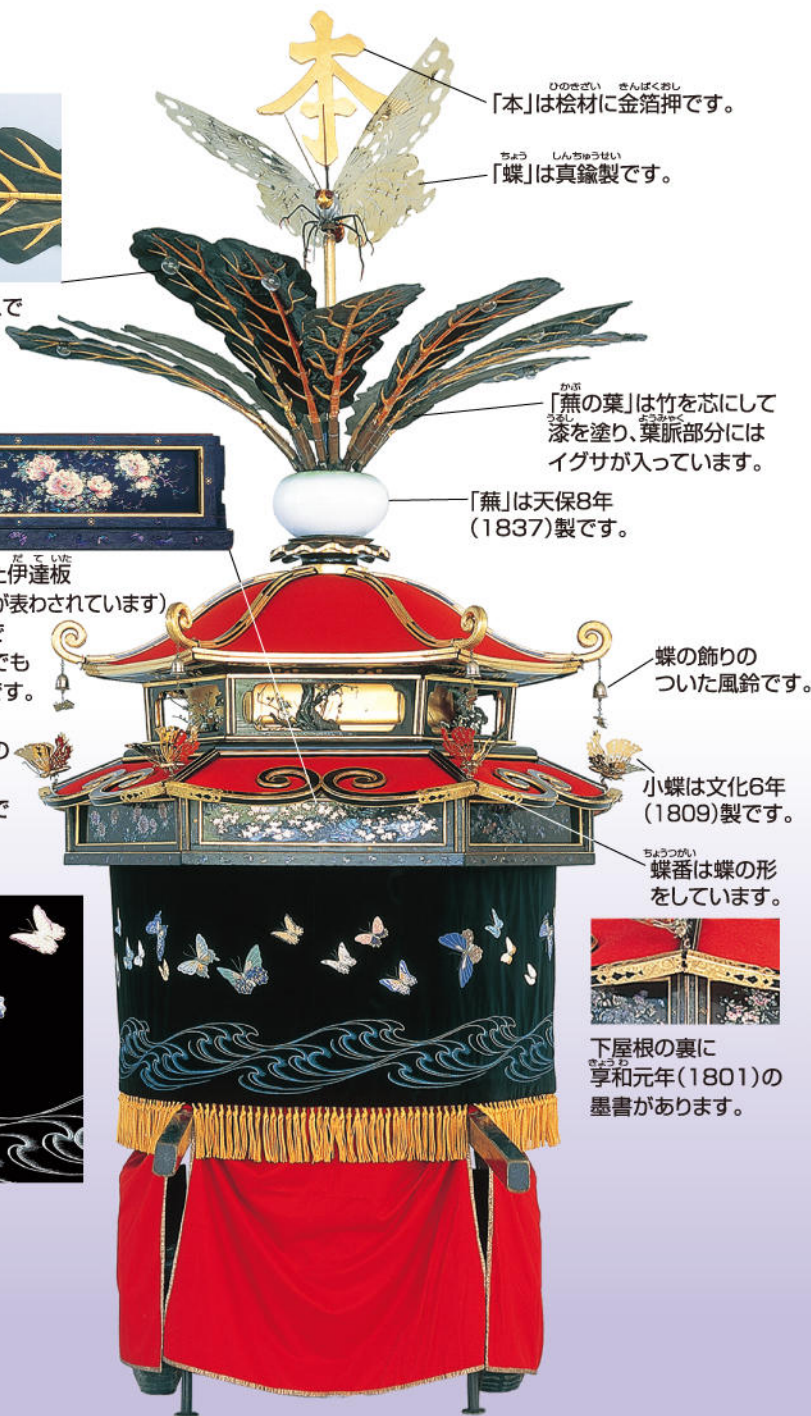


青貝細工で装飾された伊達板  
(桜、牡丹、菊、梅、椿、楓が表わされています)  
文化7年(1810)製で  
長崎青貝細工の国内でも  
早い作例として貴重です。

青貝細工…蝶細工の  
一種で、貝の裏に銀箔  
を貼ったり、赤や黄色で  
彩色されています。



水引幕  
黒天鰯絨地  
海原群飛蝶模様  
繡水引幕  
(平成10年復元新調)



「本」は松材に金箔押です。

「蝶」は真鍮製です。

「蕪の葉」は竹を芯にして  
漆を塗り、葉脈部分には  
イグサが入っています。

「蕪」は天保8年  
(1837)製です。

蝶の飾りの  
ついた風鈴です。

小蝶は文化6年  
(1809)製です。

蝶番は蝶の形  
をしています。



下屋根の裏に  
享和元年(1801)の  
墨書があります。

笠鉦「本蝶蕪」は、旧八代城下町の  
「本町」から出されています。  
笠の上に、「本」の字、「蝶(町)」「蕪(株)」  
をのせており、本町の株がある、つまり  
本町の商売繁盛を意味しています。  
「本蝶蕪」を出している本町は、江戸  
時代、八代城下町の中心となった町筋  
で、町の中央(現在の町本町アーケード)  
を東西に薩摩街道が通っていました。  
嘉永6年(1853)8月、將軍家に  
嫁ぐため、江戸に上った篤姫もこの道  
を通っていきました。  
明治元年(1764)の記録によれ  
ば、この頃、すでに現在のような本・蝶・  
蕪の笠鉦が出されていました。



現在の笠鉦「本蝶蕪」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉦「本蝶蕪」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



本町の商売繁盛を願った笠鉦

# 「笠鉦」(ほんちようかぶ) 本蝶蕪

第2番

《本町笠鉦本蝶蕪保存会》



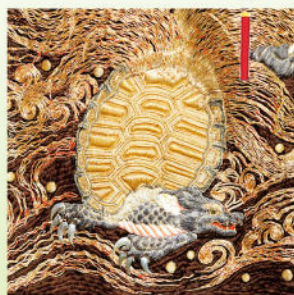


「蘇鉄の葉」は、本物の  
蘇鉄の葉を祭り前に  
毎年取り付けます。

幹は松笠を貼り付けた  
ものです。



下欄間には、  
麒麟、鳳凰、応龍、霊亀  
の彫刻があります。



水引幕  
黒紋繻子地  
巖に波瑞亀模様繻子水引幕  
明治32年(1899)製  
(平成6年修復)



上欄間には、天女や鶴、菊、  
桐の彫刻があります。

菊と桐の裏には、  
寛政5年(1793)  
の墨書があります。



白い兎と黒斑の兎が  
います。赤い目玉は  
ガラス製です。

町の人たちが  
何世代にもわたって  
補修したあとが  
残っています。

笠鉾「蘇鉄」は、旧八代城下町の「二之町」から出されています。  
蘇鉄は、枯れても焼けた釘で打てば蘇る  
といわれ、不老不死・起死回生の霊木です。  
また、葉の形が鳳凰の尾羽に似ているところから「鳳尾蕉」の別名があります。鳳凰は、優れた為政者が現れたとき姿を表すといわれ、家門の繁栄、太平の象徴です。  
二之町は、町の中央を南北に薩摩街道が通り、町名の由来は、八代城下第二の町屋街であったことによるともいわれています。  
明和元年(1764)の記録によれば、この頃、すでに現在のような蘇鉄の笠鉾が出されていました。



現在の笠鉾「蘇鉄」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉾「蘇鉄」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



# 「笠鉾」(そてつ) 蘇鉄

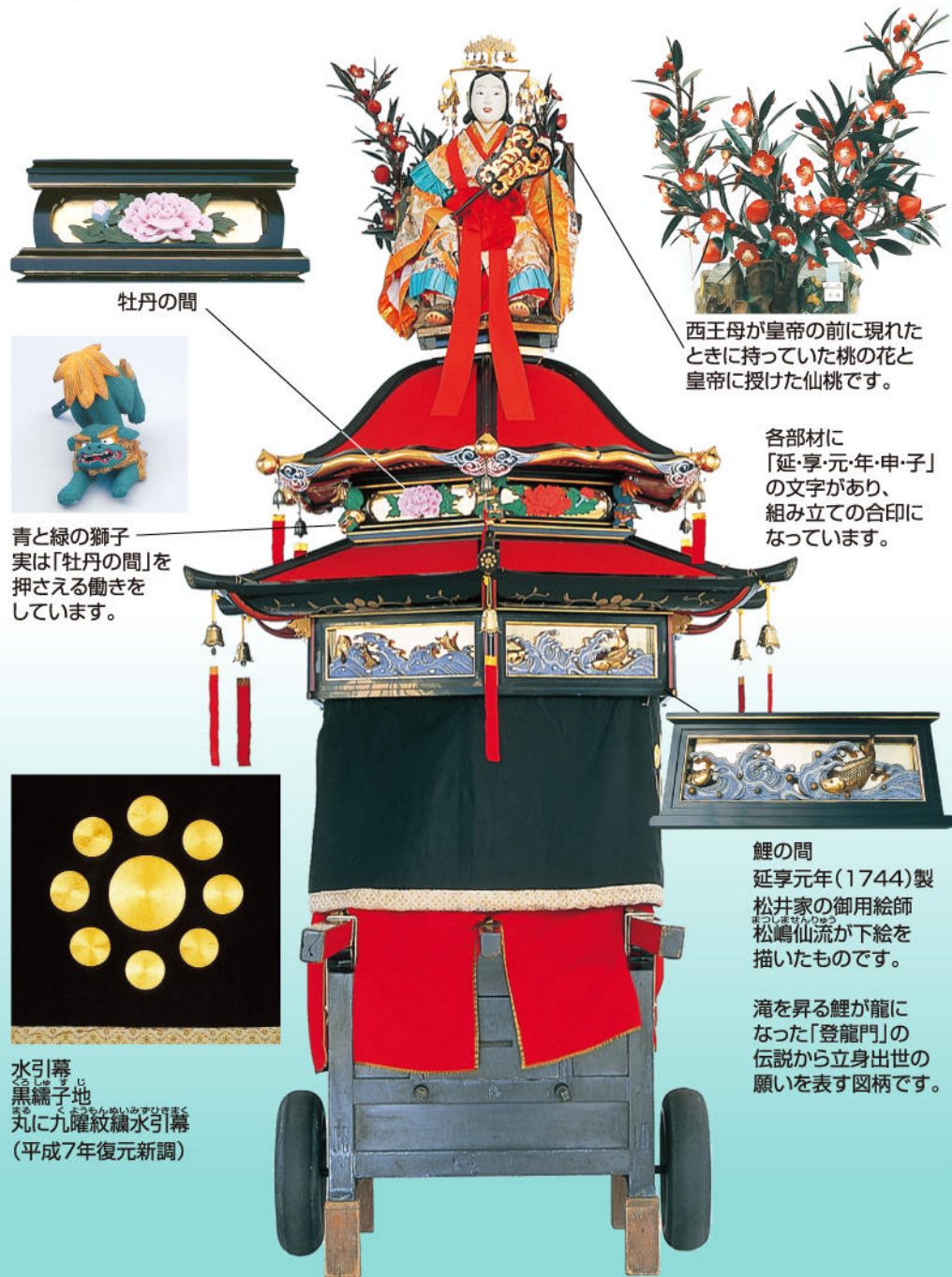
第3番

《二之町笠鉾蘇鉄保存会》

不老不死・起死回生の願いを込めた笠鉾







牡丹の間



青と緑の獅子  
実は「牡丹の間」を  
押さえる働きを  
しています。



水引幕  
黒織子地  
丸に九曜紋繻水引幕  
(平成7年復元新調)

西王母が皇帝の前に現れた  
ときに持っていた桃の花と  
皇帝に授けた仙桃です。

各部位に  
「延・享・元・年・申・子」  
の文字があり、  
組み立ての合印に  
なっています。

鯉の間  
延享元年(1744)製  
松井家の御用絵師  
松嶋仙流が下絵を  
描いたものです。

滝を昇る鯉が龍に  
なった「登龍門」の  
伝説から立身出世の  
願いを表す図柄です。

笠鉾「西王母」は、旧八代城下町の「通町」(江戸時代は新町)から出されています。「西王母」は、謡曲「西王母」に登場する美しい仙女で、治世がよく行われていることを讃えて皇帝の前に現れた西王母が、3千年に1度しか実を結ばないという仙桃を捧げて舞うというおめでたい物語です。

町名の由来は、八代城下建設時に本町、二之町に配しきれない新興の町衆に割り当てられた町屋街であったことによるといわれています。

笠鉾を構成する部材には、「延・享・元・年・申・子」の各文字が記されており、組み立てのときの合印になっています。この年(延享元年・1744)がこの笠鉾の制作年代と考えられます。



現在の笠鉾「西王母」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉾「西王母」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



# 西王母

「笠鉾」(せいおうぼ)

天下泰平を讃える仙女を飾った笠鉾

第4番

《通町笠鉾西王母保存会》





上屋根軒先の腕木に  
安永5年(1776)  
の墨書があります。

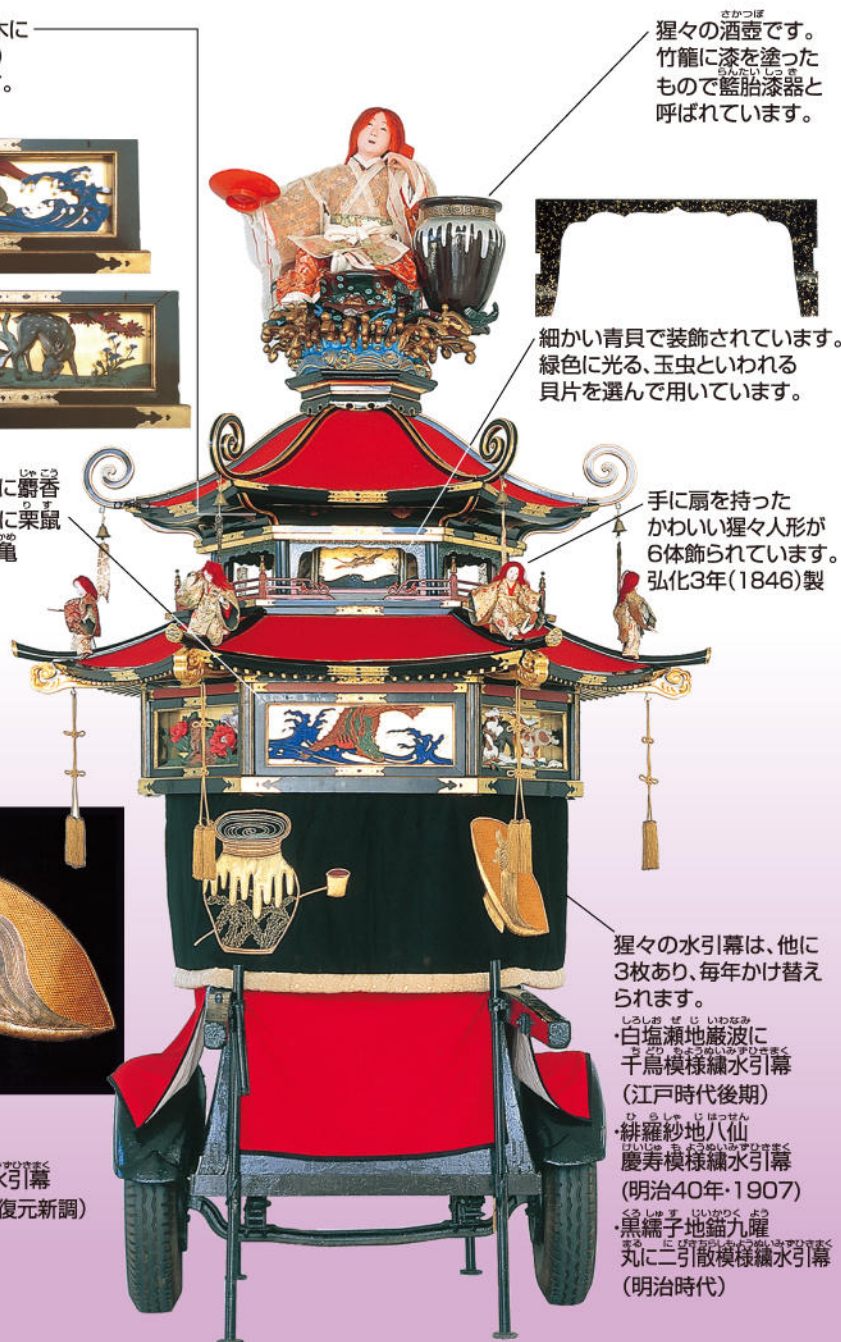


欄間の彫刻

- ・浪に飛龍
- ・牡丹に麝香
- ・笹、鶯に兎
- ・葡萄に栗鼠
- ・楓に鹿
- ・浪に亀



水引幕  
黒羅紗地  
酒瓶杯杓模様繡水引幕  
(平成8・10・11年復元新調)



狸々の酒壺です。  
竹籠に漆を塗った  
もので藍胎漆器と  
呼ばれています。



細かい青貝で装飾されています。  
緑色に光る、玉虫といわれる  
貝片を選んで用いています。

手に扇を持った  
かわいい狸々人形が  
6体飾られています。  
弘化3年(1846)製

狸々の水引幕は、他に  
3枚あり、毎年かけ替え  
られます。

- ・白塩瀬地蔵波に  
千鳥模様繡水引幕  
(江戸時代後期)
- ・緋羅紗地八仙  
慶寿模様繡水引幕  
(明治40年・1907)
- ・黒緋子地錦九曜  
丸に二引殿模様繡水引幕  
(明治時代)

笠鉾「狸々」は、旧八代城下町の「紺屋町」から出されています。  
狸々は、謡曲「狸々」に登場する仙獸で、孝行者の高風という青年に、どんなに汲んでもなくならない酒壺を与え、高風はこの酒を売って富を得たという物語です。紺屋町の商売繁盛と家門繁栄を祝ったものです。  
紺屋町は、球磨川の支流前川右岸に位置し、その清流を利用して、糸や衣類の染め物の町として発達したことが町名の由来といわれています。  
明和元年(1764)の記録によれば、この頃すでに、現在のような狸々の笠鉾が出されていました。



現在の笠鉾「狸々」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉾「狸々」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



# 「笠鉾」(しょうじょう) 狸々

第五番  
《紺屋町笠鉾狸々保存会》

商売繁盛と家門繁栄を祝った笠鉾





本物のように精巧に作られています。

蜜柑は、桐を削りだし彩色したものです。葉は銅線を芯にして和紙を貼り、漆で固めてあります。

鉢は、卵の殻を使った漆塗りです。

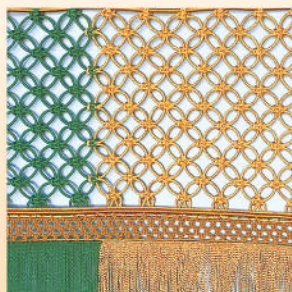
屋根が朱漆塗なのは、この笠鉾だけです。

上屋根の裏側が豪華な、虎皮模様になっています。(沈金の技法です) この裏に宝暦3年(1753)の墨書があります。

6匹の猿と3匹の狢(犬)がいます。

どれも表情が豊かです。

華やかで珍しい花や鳥が表されています。  
「ザクロ・ルリ」  
「杓南花・蓮雀」  
「ヒワ・オトラインコ」  
「フヨウ・赤ヒゲ」  
「ナギ・バン」  
「木双花・山柳クイ」



水引幕  
五色七宝繫結網水引幕  
(平成7年復元新調)



笠鉾「蜜柑」は、旧八代城下町の「中島町」から出されています。  
「蜜柑」は、江戸時代に幕府献上品となっていた八代の特産物「八代(高田)蜜柑」を表現しています。また、田道間守が垂仁天皇の勅を受けて常世の国から持ち帰ったという「非時香菓」という仙薬であるともいいます。  
中島町は、16世紀、相良氏が八代を支配した時代、客人をもてなす迎賓館として建てられた中島館があり、八代城下となる以前から栄えていた地域です。  
笠の内側の部材に、宝暦3年(1753)の墨書があり、「手斧立」と書かれていることから、この年が制作年代と考えられます。



現在の笠鉾「蜜柑」の行列

絵巻に描かれた笠鉾「蜜柑」の行列  
八代神社所蔵「妙見宮祭礼絵巻」より



# 八代特産の高田蜜柑を飾った笠鉾

## 「笠鉾」(みかん)

第6番

《中島町笠鉾蜜柑保存会》





釣竿を持って  
います。

めずらしい  
鯛に乗った姿勢の  
恵比須さんです。

鯛の目玉は  
ガラス製です。

鯛は、カヤの木を  
用いた杵木造です。



内部に「八代の大工三平次が  
14歳でこれを作った」との墨書  
があります。鯛の製作も三平次。  
14歳とは思えない出来です。  
明和元年(1764)製



屋根の上には、ぶどうに  
リスがいます。



水引幕  
黒天鷲絨地  
若に獅子牡丹模様繡水引幕  
大正時代製作  
(平成6年修復)



上屋根の裏には  
文政3年(1820)の  
墨書とこの製作に  
関わった町の世話役  
たちの名前がズラリ  
刻まれています。

欄間には、  
翼を持った応龍の  
彫刻があります。

笠鉾「恵比須」は、旧八代城下町の「徳  
淵町・淵原町」から出されています。  
「恵比須」は七福神の一人で、おめでた  
い鯛に乗り、海を渡るその姿は、港として  
繁栄した徳淵の歴史を物語っています。  
徳淵は、中世、名和氏や相良氏が八代  
を支配した時代、国内はもとより、中国  
や琉球との貿易港として栄えたところ  
で、元和8年(1622)、徳淵村・松江村の  
間に八代城が築かれると、前川を渡る薩  
摩街道の渡し口や札の辻が置かれ、八代  
城下の中心的な港として繁栄しました。  
「恵比須」の鯛が乗る波は、明和元年  
(1764)に「大工三平次」が製作した  
もので、この年、笠鉾の飾りが「桐に風  
」から「恵比須」に作り変えられました。



現在の笠鉾「恵比須」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉾「恵比須」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



鯛にまたがる、えびす様が象徴の笠鉾

「笠鉾」(えびす)

恵比須

第7番

《徳淵町・淵原町笠鉾恵比須保存会》







寄せ木で作られた鉢。  
花の裏に文政7年  
(1824)の墨書



松葉は竹で  
作られています。



ケヤキの彫刻—  
下段は木彫りで、梅・竹・  
蘭・菊が表されています。  
「四君子」として尊重  
される図柄です。

白木の木彫人形が  
乗っています。翁と、  
鶴と亀がおり長寿を  
表現しています。



水引幕  
黒天鵲絨地  
向かい双龍模様繡水引幕  
大正時代製作  
(平成9年修復)



六歌仙が  
描かれています。  
文化2年(1805)製

- ◎僧正遍昭
- ◎在原業平
- ◎文屋康秀
- ◎喜撰法師
- ◎小野小町
- ◎大友黒主

※住吉明神は歌の  
神様でもあります。

黒漆地に金時絵で  
桜、たんぽぽ、水仙、  
蓮などの花鳥模様  
を表しています。

# 松

「笠鉢」(まつ)

第8番

《平河原町笠鉢松保存会》

笠鉢「松」は、旧八代城下町の「平河原町」から出されています。  
「松」は、謡曲「老松」や「高砂」に基づくと考えられ、長寿をことほぐ植物です。とくに「高砂」は、住吉明神が現れて泰平の世をたたえるおめでたい曲です。  
平河原町は、前川岸に位置し、荷揚げ場と荷物の出入りを管理する川口番所が置かれていました。呉服類の間屋や小売商が多かった町といわれています。  
明和元年(1764)の記録によれば、この頃の平河原町の笠鉢は「孔雀」で、1800年代に「松」に変わったようです。



現在の笠鉢「松」の行列

絵巻に描かれた  
笠鉢「松」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



長寿や和合を象徴する松を飾った笠鉢



A detailed illustration of a dragon and a phoenix, known as the 'Long Feng' motif. The dragon is depicted in shades of blue and green, with a long, flowing mane and a multi-colored body. The phoenix is shown in vibrant red and orange, with a long, flowing tail. They are set against a background of stylized blue and white waves. The entire scene is enclosed within a rectangular frame with a red border, which is further embellished with traditional Chinese decorative elements at the top and bottom.

ぶんせい  
文政13年(1816)  
の墨書があります。

せんちょう  
金鳥と呼ばれる  
飾りです。

「笠鉾」「迎陵類伽」は、旧八代城下町の「塩屋町」から出されています。

迎陵類伽は、上半身は人、下半身は鳥の姿をした想像上の生物で、極楽浄土に棲むとされ、たいへん美しい声で鳴き、「妙音鳥」とも呼ばれます。謡曲「羽衣」にも登場し、この世が極楽世界さながらであることを祝ったものです。

塩屋町は、八代城の西に位置した町で、町名の由来は、元和5年（1619）、加藤正方の八代城築城の折、干拓により塩浜などに開発した新地であったことにより、ます。塩屋町には、寛永9年（1632）、細川三斎が宇佐八幡宮より勧請した塩屋八幡宮があり、11月23日の妙見祭では神幸行列は塩屋八幡宮から出発します。

明和元年（1764）の記録によればこの頃すでに、現在のような迎陵類伽の笠鉾が出されていました。



絵巻に描かれた  
笠鉾「迦陵頻伽」の行列  
八代神社所蔵  
「妙見宮祭礼絵巻」より



第9番  
《塩屋町笠鉾迦陵頻伽保存会》



世の中の平和と幸せを願つた笠鉾





**籠**  
かご  
江戸時代の神仏習合の頃、妙見宮の隣にあった神宮寺の高僧が籠に乗っていたそうです。明治の神仏分離で寺僧の参加が途絶え、籠も行列から消えてしまいましたが、平成2年に復活し、以後毎年かわいらしい稚児籠が見られます。



鉄砲毛槍隊は、江戸時代には祭りの警護のため八代城の足軽や八代郡の郡簡が務めていました。明治の八代城廃城に伴い途絶えていましたが、平成2年に絵巻をもとに復元され、威厳のある整った隊列を見ることが出来ます。

## 鉄砲・毛槍

**白和幣**  
しらにぎひ  
白和幣は、もともと江戸時代に妙見宮周辺の老若男女が白い御幣を持って行列に加わっていたものです。明治時代以降、途絶えてしまいましたが、平成10年に絵巻などをもとに復元され、行列に華やかさを添えています。



**神輿**  
かみこ  
神輿は寛永13年(1636)6月に、時の八代城主細川忠興公が妙見宮に奉納したもので、内外に金箔を張り、天井には忠興公直筆と伝わる龍の絵を配するなど、たいへん豪華なつくりで、江戸初期のはつらつとした武家文化をみることが出来ます。(現在の神輿は、平成10年に復元新調されました)

## 籠



獅子に子どもの頭をのっんでもらうと「元気に育つ」といわれ縁起のいいものとされます。



異国情緒を盛り上げる長ラッパ吹き

**獅子子**  
妙見祭の獅子舞は、中国風の衣装や楽器を用いるのが特徴で、元禄4年(1697)八代城下の豪商井坂屋勘七が奉納したのが始まりです。獅子は、角2本、胸が赤と白の雄獅子と角1本、胸が赤と黄色の雌獅子で1対。1匹の獅子の中に2人が入り、頭前足と尻尾後足をそれぞれ受け持ちます。その息のあった動きは、まさに神技！玉振り役の童子とともに、チャルメラや太鼓、ドラに合わせて表情豊かに演じます。



**木馬**  
きんま  
木馬は、江戸時代に八代城下に住む商人たちが、子どもが七五三を迎えるお祝いに木馬や衣装を眺めて奉納し、12頭が出されていきました。明治時代以降、奉納が途絶えてしまいましたが、昭和62年に絵巻物などをもとに復元され、今では総勢12頭のきらびやかに飾られた馬にまたがる子どもたちの晴れ姿が、祭りで披露されます。

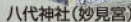


**花奴**  
はなこ  
花奴は、松江村の虎右衛門が、江戸花奴の作法を習い伝えたのが始まりといわれ、宝暦2年(1752)には、行列に出たことが確認されています。先頭の2人が持ついる道具は、城主の衣装を入れる帛箱です。次は雨傘である立傘です。最後は城主の「かぶり笠」を乗せる丸い台笠で、黒い布に覆われ、道具の受け渡しの際の妙技は見事です。

## お上り行列 主な出し物

11月23日の八代妙見祭の出し物の行列(お上り)は、塩屋八幡宮から八代神社(妙見宮)まで、約6kmを歩きます。行列に参加する人は、およそ1700人。もいて、行列の長さは1.5kmになります。





## 八代神社(妙見宮)の由緒

妙見宮の南に位置する山岳部には、

妙見祭のはじまり

座したのが始まりと伝えられています  
その後、延暦14年(七九五)に横嶽  
(三室山)の山頂に上宮が創建され  
永暦元年(二六〇)には上宮の麓に中  
宮、文治2年(二八六)に現在の八代神  
社の場所に下宮が創建されました。

八代の繁栄を伝える妙見祭

14世紀以降、名和氏が築いた山城・古麓城(当時の八代城)があり、この帯が現代の政治・経済・文化の中心地とした妙見宮の周辺には多くの寺院が建ち並び、商工業者が門前町・城下町を形成し、海外との交易も行われ、おおいに繁栄していたと考えられています。

相良氏が八代を治めた16世紀にはすでに妙見下宮から中宮へ神興の神幸舞楽や流鎧馬などの祭礼行事が行われ多くの見物人を集めていたようです。

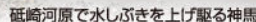
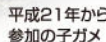
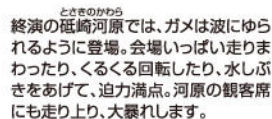
紀の終わりに頃、八代町から等鈴や獅子舞、亀蛇など、趣向を凝らし、贅を尽くした出し物が奉納されるようになり、次第に豪華ななつていきました。熊本藩主細川氏や細川氏の家老で八代城主の松井川氏は、地域での結束を高めるため祭礼を盛り立てることに心を配りました。19世紀初め頃、松井家のお抱え絵師が描いた祭礼絵巻によつて、さまざまな階層の人々が体となって参加する盛大な祭りの様子を知ることができます。

明治維新以降、行列から姿を消したのももありましたが、現在ではふるさと創生事業などにより行列の復元や修復等が行われ、往時の豪華な行列が再現されています。

八代妙見祭は、九州南部を代表する祭礼行事として、平成二十三年三月九日付で国重要無形民俗文化財に指定され、同二十八年十二月一日には全国32の祭りとともに「山鉦屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録されました。

### 《11月23日／予定時刻》

- 7:30 塩屋八幡宮前出発  
8:30 ハーモニーホール  
(出町公園で演舞)  
9:00 八代駅前子ども獅子演舞  
9:30 八代駅前に到着  
(紹介及び演舞～11:30頃まで)  
10:00 八代駅前出発  
11:00 八代神社(妙見宮)到着  
11:00～ 宮地小学校グラウンドで  
13:00 笠鉾・亀蛇・木馬・籠を展示  
12:30 獅子が砥崎河原で演舞  
13:00 行列が宮地小学校グラウンドを出発  
13:10～ 砥崎河原で紹介及び演舞  
(～17:00頃まで)  
14:30 獅子・神馬・神輿は中宮で神事  
19:00～ 本町札の辻で獅子演舞



ていまいた。その後、田中町から奉納された、現在では田中町から出ない場合、毎年12月1日希望者の中から抽選を行い、翌年の奉納を決めています。節馬は江戸時代には八代城内から12頭が毎年出されていましたが、明治以降はそれそれの町内からの奉納となり、現在では希望者それぞれの奉納となっています。節馬の順番は、当日朝6時に抽選で決めます。

神馬・飾馬